

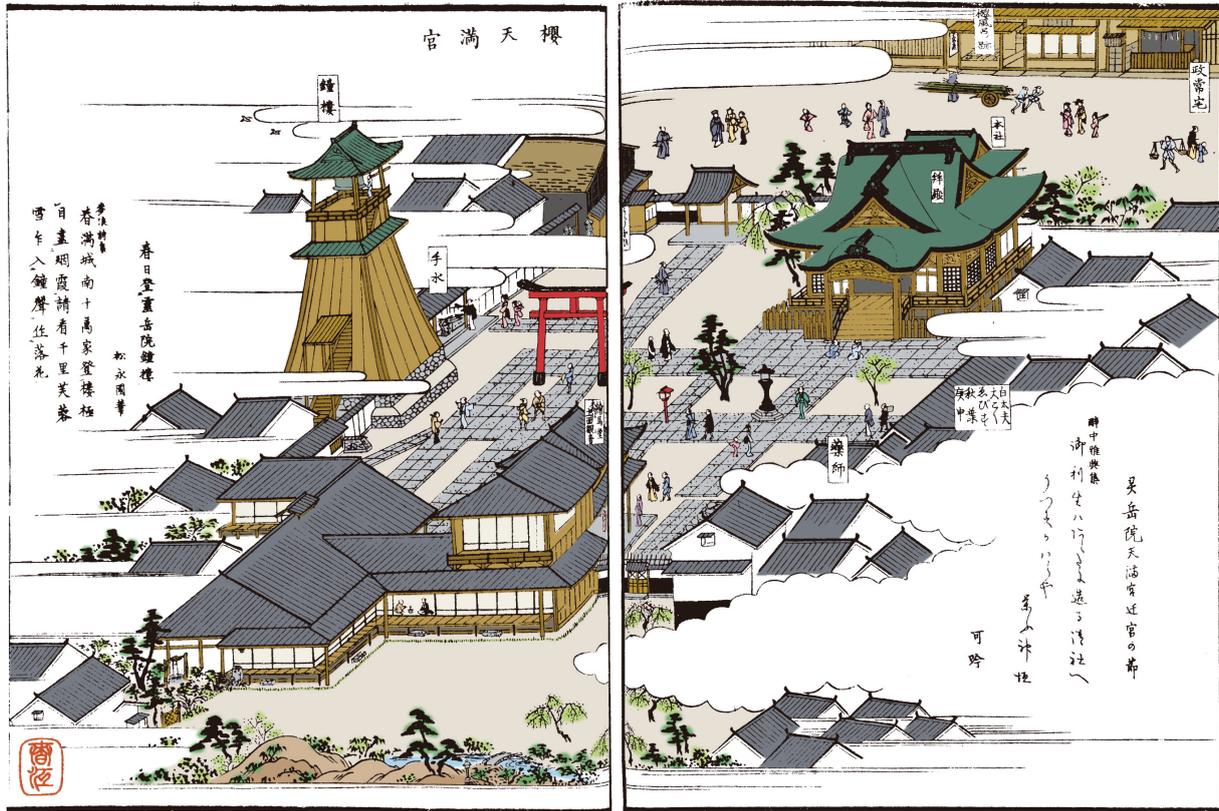
なごやのまち
今昔

尾張名所図会

さくらてん まんぐう
櫻天満宮の図

中区錦二丁目

名古屋城下に響く時の鐘



※現在地の住所と現況写真の撮影地は、資料に基づき推定したものです。
※左の絵は原本を一部加工、着色しています。

この絵は、尾張名所図会に描かれた桜天神社(中区錦二丁目)の様子です。

桜天神社は1532年に織田信長の父である織田信秀が、京都の北野天満宮から菅原道真公の木像を勧請し、那古野城内(名古屋城二の丸付近)に祠を設けたのが始まりといわれています。

1538年に信秀が織田家の菩提寺として、中区丸の内2丁目を中心として広大な境内を持った萬松寺を開基すると、寺の鎮守として祠を現在地付近に移転させました。萬松寺には徳川家康が幼少期に人質として滞在しており、また信長が父、信秀の葬儀の際に抹香を位牌に投げつけたという逸話があります。

その後、萬松寺は大須へ移転しましたが天神社はそのまま残り、境内にあった桜にちなんで「桜天神社」や「桜天満宮」とよばれ親しまれてきましたが、1660年の大火で桜は焼失してしまいました。翌年の再建の際には境内に高さ約7.5mの鐘楼をつくり、明治になるまで名古屋城下に時を告げていました。当時の鐘楼は現在残っておりませんが、鐘楼を模したものが参道入口に再建されています。

図絵の右上隅に描かれている政常宅というのは尾張藩のお抱え刀鍛冶の家で、氏房、信孝と並び後世に「尾張三作」と呼ばれ、すぐれた作品を残しています。

1937年には神社の北側にあった菅原通が、移転した名古屋駅まで拡張延長され、一般公募により「桜通」と命名されました。1989年には桜通に地下鉄が開通し、神社の境内を含めた再開発により隣地には22階建てのビルが建つなど、ビルに囲まれた中、今も名古屋三天神の一つとして崇敬されています。

〈参考文献〉※()内は、まちづくりライブラリーの請求記号

「朝日文左衛門と歩く名古屋のまち」ゆいぽおと (Se-オ)

「都市計画概要2013」名古屋市 (2B18-2014)

「尾張刀工譜」名古屋市教育委員会 (Sc-フ)



現在の桜天神社 (桜通本町交差点西南)
高いビルの谷間にひっそりとたたずんでいる。左手前の鐘楼は当時の鐘を模したもの。当時の高さは約7.5m



ひじえちよう
「泥江町」交差点から名古屋駅(三代目)を望む。[1953年撮影]